

「生きているアート」— 彫り物の「アート」とエージェンシー

本発表では、現代の東京下町における彫り物と彫り物をめぐる人々の実践を事例に、「生きているアート」である彫り物と人々の経験の諸相について考察する。日本の伝統的芸術である彫り物の模様や技術は、1970年代以降の西洋における「タトゥー・ルネッサンス」にも、大きな影響を及ぼした。このように国外で日本の彫り物が高い評価を受ける一方で、日本国内では彫り物を犯罪性や社会集団と結び付ける歴史的に構築されてきた視点が未だに存在している。

従来の彫り物に関する先行研究では、彫り物の模様の象徴的な意味やそれらが刻み込まれた身体をさらすことに着目した象徴的・視覚的アプローチが分析方法として用いられてきた。これらの研究は、彫り物と身体との関係を、何らかの象徴や記号——特定の集団と社会の関係や自己形成——として分析・解釈する傾向にあり、彫り物それ自体の存在論的位置づけは明らかになってこなかったといえよう。本発表では、彫り物は人間の身体に存在することによって個人や社会に働きかけるものであるとの観点から、彫り物が彫られた身体とそれをめぐって生起する人々の経験に着目し、アルフレッド・ジェルのエージェンシーの概念を援用しながら議論を進める。皮膚に刻まれた彫り物は、彫り物を身にまとった人にとって、お守りや厄除け、或いは他の超自然自称として経験されるものとなる。さらに、彫る側の彫り師にとっては、彫り物が常に顧客の身体と接しているものでありながら、針と墨、そして彫る行為自体によって生まれてくるモノ的なものともなる。

執筆者が4年あまりにわたり行ってきた東京下町におけるフィールドワークからは、次の二点が明らかとなった。第一に、彫り物を生きるという経験が単に身体の表面となる皮膚に刻み込まれた象徴や記号としてあるのではないことである。第二に、彫り物の視覚的効果にのみ着目することには限界があることである。彫り物は歴史的に「下町」と、そこに住まう人々のアイデンティティと密接に関わってきた。彫り物を彫る彫り師、彫り物を身にまとう人々、そして彫り物を眺める周囲の人々はいかに「彫り物」を経験しているのだろうか。

本発表では、彫り物をめぐる人々の「生きられた経験」(lived experience)に着目することで、彫り物にかかわるアクター間のより複雑なインタラクションを浮き彫りにする。特に、彫り師、顧客、そして彫り物を彫るプロセスを考察対象とし、彫り物を見せる/見せられる場・空間である祭りの公共空間において、彫り物を通して形成される関係にも注目する。ここから明らかになるのは、彫り物が、ヤクザのような「社会的地位」を象徴的に表すものであると同時に、物質的・社会的存在として「アート」となり、さらにお守りや厄除けの形をとった「超自然的なもの」として人々の経験と深く関わる点である。本発表では、彫り物が単なる身体的な経験でなく、皮膚の表面より深いところまで染み込むような事象である。